

フランス語学習者の語用論的知識：「断り」行為をめぐって

原田 早苗

1. はじめに

外国語でコミュニケーションを成功させるためには、文法的に正しい文を作り、正しく発音できるだけでなく、実際に使う状況や相手との関係を考慮して語用論的にも適切な発話をしないといけない。近年、外国語教育において語用論に対する関心が高まってきているが、文法や語彙、発音の指導に関する研究に比べると語用論に焦点をあてたものはまだ少ない。本稿では、ある日本人フランス語学習者グループが、フランス語の断りの発話行為に対してどのようなイメージを抱いているか、また、そのようなイメージを抱く要因が外国語教育のどの側面にあるのかを探る。

2. 語用論と異文化間コミュニケーション

外国語教育における語用論の研究は、発話行為理論(Austin, 1962)や円滑なコミュニケーションを構築するための語用論的な働きを研究したポライトネス理論(Brown and Levinson, 1987)、そして語用言語学 *pragmalinguistics* と社会語用論 *sociopragmatics* を区別した Leech(1983)などに基づいているものが多い。Thomas (1983)は *pragmatic failure* を論じ、いかなる発話にもなんらかの意図、機能があり、その意図を正しく伝えられないとき、あるいは理解できないときに「語用論的失敗」が起こると述べている。

語用論的失敗は、文法などの誤りと大きく異なる。非母語話者が文法や語彙、発音を間違えると、それは語学能力の不足として解釈してもらえるが、語用論的失敗の場合は間違いとしてではなく、話者の人格的な欠点として認識される可能性がある。例えば、命令の意味合いをもつ "I want you to..." を依頼のつもりで使用して無礼だと思われるケースや日本の学校では年齢が近くても先輩であれば丁寧語を使うことを知らない帰国子女が生意気と受け取られるケースである。

語用論的特徴の相違が異文化間コミュニケーションに及ぼす影響を論じた先行研

究は英語や日本語については数多くあるが¹、それに比べるとフランス語についてはまだ少ない。Higashi(1992)は、要求を述べる日本人留学生とフランス人職員の間の実際のやりとりを分析し、日本人の要求が曖昧に表現されるために、聞き手のフランス人に要求として認識されない過程を明らかにしている。Takeuchi(2004)は、意見の相違がみられる場面を日仏で比較し、日本人は意見の相違をフランス人ほど明らかにせず、また相手の意見に同調する部分が多く展開されると指摘する。

ある程度の語学力を前提とする発話行為もあるが、語用論的特徴は初級レベルの事項にも見出せる。語学テキストに頻出する買い物場面の"Bonjour"(こんにちは)はその一例である。フランスでは店内に入るとき客のほうも"Bonjour"と言い、挨拶せずにいきなり店員に話しかけることはしない。このことを知らない日本人が無言で店に入ったら無礼に映るだろう。さらに微妙なところにも語用論的失敗の要因は潜んでいる。Béal(2010)はフランス人とオーストラリア人の挨拶や褒め言葉に対する返答、そして議論の仕方を分析している。話している相手を途中で遮って話す行為を、フランス人は相手の話に関心を持っている証拠として行うのに対して、オーストラリア人は無礼と受け止めると述べている。

異文化間コミュニケーションにおける語用論的失敗には、相手の言語・社会へのステレオタイプが絡んでいることもある。例えば、「○○人は謝らない」と思っているために、本来の自分であれば謝る場面においても謝らないで無礼に思われる行動をとってしまう可能性がある。ステレオタイプや思い込みは、言語行動に影響を与える点で、外国語教育研究において重要なテーマである。長年、ステレオタイプの研究は様々な文化圏に対するイメージとその真偽の程を論じるものが中心だった。しかし、今日では、真偽を問う研究よりも、ステレオタイプがどのように利用され、社会にどのように影響しているのかを研究するほうに重きがおかれている(Amossy & Herschberg Pierrot, 2004)。また、ステレオタイプには、偏見を促すというマイナスのイメージがあるが、逆に多種多様な情報を単純化することによって認知的な負担を軽減するというプラスの役割もあり、それは外国語を学ぶ際の助けにもなる。日仏相互のステレオタイプについては Yatabe(1994)、Honoré(1994)、石丸(2009)などの研究があり、教師として学習者がどのようなステレオタイプを抱いているのかについて知っておくことも重

¹ 外国語学習者の中間言語語用論に関する諸理論や研究については清水(2009)を参照のこと。

要である。

3. フランス語での断りに対するイメージ

学習者の語用論的知識についての実証研究は数多く行われているが、その大半は産出に関するものである。例えば、謝罪の場面を設定し、学習者に筆記あるいは口頭で謝りを産出させ、母語話者のそれと比較するタイプの研究である。産出に比べ、理解に関する研究のほうが少ないが、母語話者の発話をどのように受け止め、理解しているかは産出に影響するものであり、その重要性は大きい。そこで、数ある発話行為のなかでも複雑な断りを取り上げ、フランス語の断りをどのように理解しているかを調べるために、ある日本人フランス語学習者グループにインタビュー調査を行った。

3.1 学生へのインタビュー

筆者が担当するフランス語の授業の一つに、映画を教材とするものがあった。その映画「サンドラの週末」(2014年公開)は、ベルギー・フランス・イタリア合作であり、病気で休職していた主人公のサンドラが復職に向けて奮闘するストーリーである。経営難にある会社側は、サンドラを復職させるのであれば社員のボーナスをカットせざるを得ないと主張し、社員が投票によってサンドラかボーナスかを選択するよう求めた。サンドラは投票が実施される前に、同僚の協力と理解を得るために同僚宅を一軒一軒訪ね歩くことになる。ボーナスを諦めてほしいというサンドラの「依頼」と同僚の「承諾」あるいは「断り」の場面が繰り返されるが、授業ではそれらの場面を中心に聞き取りの練習を一学期間行った。また、併せて異文化間コミュニケーションに関する文献²の抜粋を読んだため、インタビューを行った学期末の時点では語用論や発話行為といった用語はある程度知っていた。

この授業の受講生は、フランス語学科の2年次生11人であり、全員が大学入学以前に日本の中学・高校あるいはフランスやアメリカでフランス語を学んでいる³。従って2年次になった時点ですでに11人のうち、CEFRのB1レベルに達しているのが7人、

² Kerbrat-Orecchioni, C.1996, *La conversation*, Seuil.

³ フランス語学科では、このような既習生用の授業をいくつか設けている。

B2 レベルが 4 人いた。また、全員がフランスに行った経験があり、旅行で行った学生が 3 人、2 週間から 3 週間の短期語学研修で行った学生が 5 人、フランスで生活し現地校に通っていた学生が 3 人いる。

学期の終わりに学生と個別にインタビューを行った。事前に質問紙を用いて、映画で観た断り場面について、「フランス語と日本語のどちらでよく使われる言い方だと思いますか」「フランス語で似た場面に遭遇したら、あなたはこの言い方をしますか」「日本語で似た場面に遭遇したら、あなたはこの言い方をしますか」の質問に答えてもらっていたため、その回答を元にして行われた半構造化インタビューである。一人あたり平均すると 20 分前後のインタビューとなった。

3.2 主な 4 つのイメージ

インタビューでは多岐にわたる興味深い回答が得られたが、主に、1) フランス語での断り方に対する印象、2) 自分だったらどのような言い回しをするか、の 2 点に集約される。2) については別稿に譲るとし、本稿では 1) を中心に回答を紹介する。

フランス語での断り方に関してもっとも多かったのは「フランス語ではストレートに言う」という回答である。インタビューした 11 人全員がこの点に言及し、例えば次のような言葉で表現した⁴。

「ストレートに言っていると感じた。」

「フランス語は結構直接的に言うじゃないですか、日本語は遠回しに言うのに。」

「みんなバシバシ言い合う。」

「フランス人はその場できっぱり『無理です』というイメージ。」

「日本ではここまで対立をはっきり言わない。」

「フランス人は明確に意思を示す。」

2 番目に多かったのが、断る際に「フランス人は理由を詳細に説明する」というコメントであり、11 人中 7 人がこの点に言及した。

⁴ 明示されていないものの、映画はベルギーのある町を舞台にしており、登場人物の多くはベルギー人の設定であると思われる。学生は必ずしも「フランス語＝フランス人」と考えているわけではないと推測するが、ここでは学生の回答に従って「フランス人」と表現する。なお、学生の回答は読みやすさを考慮して筆者のほうで意味は変えずに文体を整えた。

「日本人だったら断る理由をそんなに詳しく言わない。」

「(ボーナスが必要な理由として)夫と別れたからとか、テラスを作るためとか、プライベートまで言っているが、日本人は使い道まで言わない、詳細を話すところがちがう。」

「理由を相手に全部伝えているところ。自分がイヤな人と思われるのに、ボーナスで自分が解決したいことを全部言っている。」

「日本だったら、娘が大学に行っていて月いくらかかっているとは言わない。『うちも大変なんです…』くらいの一言にしておく。」

「家が困っていると、そういう問題は他人に伝えない、特に経済的なことは。」

3 番目に多かった回答が「自分本位に聞こえる」であり、11 人中 5 人がこの点に触れた。

「自分本位なセリフに聞こえてしまう。」

「わりと自分中心に考えている気がする。あまり日本の場面だと『自分が、自分が』とならない気がする。」

「日本だったら自分のことをそんなに言わないし、『そうか、そうか』と聞いてあげて、その上で、『でも、ごめん』と言うのに、自分のことをずっと言っている。」

そして、4 番目に多かったコメントは「自分のせいではないと言う」であり、11 人中 4 人が言及した。

「人のせいの感じが強い。」

「日本だと人のせいにするのはいさぎ悪いし、敬遠される。『私のせいじゃない』とフランス人はよく言う。"C'est pas ma faute"(私のせいではない)と言うと聞いた。」

「自分のせいじゃない、"pas moi" (私ではない)とすぐく言うと思った。」

「(サンドラの復職かボーナスかの選択肢は)『私が決めたんじゃないの』は言わなくてもわかることで、日本人はそこまで深く説明しない。」

テーマが金銭的なことに関わるため、依頼と断りのやりとりは通常あまり遭遇しない場面であるかもしれないが、逆に日本との違いもはっきり示されたとも考えられる。また、

上記 4 つのイメージのうち、全員が言及した「フランス語ではストレートに言う」については映画を観る以前から元々抱いていた学生が多く、ステレオタイプ的に全員が口にした点が興味深い。ステレオタイプというのは自分が属する社会のなかで無意識に抱くようになる場合が多く、日本では「欧米人はストレートに、日本人は婉曲に話す」というイメージが根強いことから、学生が少なからず影響を受けるのも当然かもしれない。また、フランスでの滞在経験のある友人またはフランス人の友人から聞いたという学生もいる。例えばある学生は、フランスに一年間留学した友人から「フランス人のほうがはっきり断る」と聞いたことを理由に挙げている。本人は短期間しかフランスに行っていないせいか、自分より長くフランスに滞在した日本人の友人の言葉がイメージ形成に影響している。

4. 学生が「フランス語ではストレートに言う」と感じる理由

学生がフランス語の断りに対して抱くイメージが、上記の 2.でも述べたように、誤った語用論的産出につながってはいけない。フランス人はストレートにものを言うと思込み、婉曲な言い方や前置きといったストラテジーを無視して話したとしたら、本来の自分と異なる印象を意図せずに相手に伝えてしまうことになる。このような語用論的失敗を防ぐためにも、このイメージが外国語教育のどの側面に起因するのかを探る目的で、インタビュー内容を以下でさらに分析する。

「フランス語では直接的に言う」と述べた学生に、なぜそのようなイメージを抱くようになったかと尋ねてみたところ、理由は主に次の 3 点に集約できる。1. フランス語の表現を直訳しただけで実際のニュアンスを知らないこと、2. 語学テキストが語用論的要素を十分に扱っていないこと、そして 3. フランス人に接した経験から得た感想、である。それぞれについて以下で具体例を挙げながら論じることとする。

4.1 直訳の影響

外国語教育において文法訳読式の功罪をめぐる意見は多く交わされてきており、外国語を日本語にただ置き換えるだけの直訳を助長するとの批判もその一つである。今回のインタビューのなかにも、フランス語の表現を直訳するだけで実際のニュアンスを掴んでいないために、「フランス語ではストレートに話す」というイメージを抱いていると思わせる回答があった。複数の学生がきつい表現として指摘したのは、「tu vois ?」,

"tu comprends ?"である。これは「tu=あなた」、「vois / comprends=わかる」であり、直訳すれば「あなたはわかるでしょう？」になる。ところが、フランス語では、この表現は間投詞やつなぎのことばとしてよく使われるものであり、英語の"You see ?"や"Get it ?"に相当する。映画では、断る理由を述べたあとに、"Tu vois, je ne peux pas me permettre de perdre mille euros, tu comprends ?"と締めくくる台詞のなかに出てくるが、「というわけで、ボーナスを諦めるわけにいかないのよね」程度のニュアンスであり、「わかるでしょう」ほどのきつい意味合いはないが、5人の学生がこの表現が強く聞こえると述べた。

「押し付けがましく聞こえる」

「上から目線なのでいい印象を受けない」

「『わかってるでしょ？』みたいな断定的な表現は日本では…」

最後のコメントからもわかるように、学生は"Tu comprends ?"を直訳して捉えており、フランス語でよく使われるこれらの表現のニュアンスを知らないために、実際よりきついイメージを抱いてしまっている。

"Tu as raison"についても似たような回答がみられた。直訳すれば「tu=あなた」、「avoir raison=正しい」で「あなたは正しい」だが、実際には相槌として「そうですね」程度の意味で使われることも多い。しかし、ある学生はこの表現について「やっぱり正しいとか理性(raison)の感じなので」「そのときに言っていることだけじゃなくて、全面的に正しいというニュアンスがある」と述べ、フランス人は物事ははっきりさせるという印象を改めて抱いたようだ。

上記で挙げた表現のどれにも二人称代名詞の tu(あなた)が含まれているが、tu について、「やっぱり tu とはっきり指されると...。「あなた」というように対象を限定するのはきつく聞こえる」というコメントがあり、直訳に基づく考えが根強いことが窺える。和訳の練習の際に、構文を確認する目的で「あなた」と訳すとしても、そのあとに続けて「あなた」を省略した自然な日本語に直す練習も必要だろう。

ほかにも、映画のなかで一人の同僚が断る際に言う"Mets-toi à ma place"について次のような発言があった。

「命令形を使うと、きついと感じる」

「命令形で、職場の人に言うのはどうかな」

確かに、この表現は文法上は命令法であり、直訳すれば「私の立場にもなれ」である。しかし、命令法は必ずしも指令を表現しているわけではなく、状況によってはアドバイス、勧め、懇願などを意味する。例えば、"Assieds-toi" (命令法) が「座れ」ではなく「どうぞ座って」の意味であるのと同じように、"Mets-toi à ma place" は「私の立場になってもらえないかな」と頼んでいるのである。

最後にもう一つ例を挙げることにする。映画のなかで、ある同僚がボーナスをカットされたら、それは自分にとって"C'est la catastrophe"と述べている。この表現に言及した学生は、「catastrophe は強い言葉で、こんな強い言葉を日本語では使わない」と述べている。確かに catastrophe を仏和辞書で引くと「大災害、惨事」「不幸、不慮の厄災」と記載されており、日本語に直訳すると強い表現で違和感を持つだろう。しかし、フランス語ではそれほど強い響きはなく、そのニュアンスを知っている別の学生は「"C'est la catastrophe" は、学生が「ヤバイ」のようにふつうに使うイメージだと述べた。このように、実際のニュアンスを知っているかどうかでフランス語表現から受ける印象が大きく異なる。

"Tu vois", "Tu comprends", "Tu as raison" のいずれの表現も、そして命令法も文法的には初級レベルのものであり、しかもインタビューに答えた学生は CEFR の B1, B2 レベルの高いフランス語力を持っている。それにも関わらず、字義通りの意味を超えたニュアンスを知らないケースが散見され、いかに実際の運用場面での使われ方を教えるのが難しく、また、教育のなかでそのような配慮が必要であるかがみえてくる。

4.2 語学テキストの語用論的内容

「フランス語ではストレートに言う」イメージを強化したほかの要因として、断りの場面で理由を詳細に説明している点も挙げられた。上記 3.2 で述べたように、自分は離婚したばかりでこれから家具やテレビ、洗濯機、食器を買い直さないといけないと説明する台詞や、庭にテラスと塀を作るのにボーナスを当てにしていると述べる台詞に対して、「日本だったら使い道まで言わない」というコメントが集中した。

断りという発話行為は相手への気配りが必要であり、通常は「お断りします」や「無理です」といった直接的な断りだけを発することはなく、様々な間接的な戦略を用いる。後悔（「とても残念ですが」）、理由や弁解（「その日は別の予定が入ってい

まして)、今後の約束(「次回はぜひ」)など多くのストラテジーがあるが、どのストラテジーに比重をおくかは文化圏によって異なり、それが誤解につながる要因でもある。学生が「日本人だったら断る理由をそんなに詳しく言わない」と感じたのは、アメリカ英語母語話者と日本人英語学習者の断りのストラテジーを比較した研究結果(Beebe et al., 1990)と共通する。その研究によると、断る際に用いられた「弁解」のストラテジーについて比較すると、先約を挙げる際に日本人英語学習者は曖昧な説明しなさないのに対し、アメリカ英語母語話者は先約の内容や場所などについて、より具体的な説明をした。この「曖昧」vs「具体的」の構図は、謝罪の場面にも当てはまる。学生からのコメントにあった「フランス人は『自分のせいではない』言う」は、駐在などでフランスに滞在した日本人からも「フランス人は言い訳が多い」のようなことばと合わせてよく聞かれる。しかし、理由の説明よりも「申し訳ありません」という謝罪のことばそのものに比重をおく文化なのか、具体的な理由説明に比重をおく文化なのか、その違いを認識していないために生じた誤解であるとしたら、それはまさに語用論教育で扱うべき問題である。

語学テキストを上記の観点からみた場合、その内容は十分と言えるだろうか。テキストには多くの制約があり、会話文も文法項目や語彙を盛り込みつつ、既出の事項も念頭において作成される。そのため、謝罪や断りといった場面での自然なやりとりを載せることは困難であり、非常に単純化された会話、あるいは逆に極端にステレオタイプを強調した会話(無愛想なカフェのボーイを登場させるなど)になってしまい、その中庸を取ることは難しい(Harada, 2013)。断りや反論、謝罪といった相手への気配りを必要とする発話行為は、現実には何度かのやりとりを経るものである。例えば、A が B を週末に映画に誘う場面では、「A が B の週末の予定を尋ねる→ B が曖昧に答える→ A が映画の魅力を伝える→ B が関心を装って映画について質問する→ A が映画に誘う→ B が仕事があまっていることを伝える→ A が同情する」といったやりとりが展開される。しかし、テキストに載っている会話は、「A が誘う→ B が断る」という一往復のやりとりに収まっているものが多く、以下に紹介する学生のコメントからも、語用論的要素への配慮が不足している現状がみえてくる。

映画の一場で、依頼を断る際に"Je voudrais bien qu'on puisse vous aider"(お役に立ちたいのですが)という台詞があるが、ある学生はそれについて「聞いたことのないフレーズの流れだった。Je voudrais も bien も vous aider も知っているけれど、こうやって使うのは初めて聞いたし、この言い方は断るときにいつでも使えるからいい」と述べた。この学生は CEFR の B1 レベルに達しており、個々の表現を知っているのに

も関わらず、それらを組み合わせたこの言い回しに触れたことがないのである。

また、別の学生は「フランス語ではストレートに言う」イメージを抱いた要因として、語学テキストの会話や練習問題に出てくる全体疑問文に対する答えが "Oui"か"Non"で始まることを挙げた。実際、"Vous aimez ce livre ?"(この本は好きですか?)、" Tu me prêtés ta voiture ? "(車を貸してくれる?)、"Vous vous intéressez à la mode ?"(ファッションに興味がありますか?)などの疑問文の答が"Oui"あるいは"Non"で始まる場合が大半であり、「まだ途中だけれど」「気をつけて運転するなら」「デザイナーによりけり」などの前置きで始まるケースは少ない。文法の定着を主眼としている会話文や練習問題が、学生のフランス語に対するイメージにこのように影響しているという事実を見過ごしてはいけない。

様々な制限があるが故に簡略化されたテキストの会話でも、それを土台として、教師と学生で語用論的特徴を加えながら内容に厚みを与えていくことは可能だろう(Harada, 2007)。また教師が授業で語る言語文化的な事柄や経験談の影響も大きい。インタビューのなかである学生は、フランスでは授業中に発言しなければ出席していないのと同じだと語った教師のことばを引用し、そこからフランス人ははっきり主張するイメージを抱いたと述べた。テキストの内容を補強するためにも、語用論的側面に注意を引く機会をできるだけ設けるのは重要であり、「反論」の発話行為の指導を論じた Debyser (1980)も述べているように、複雑な発話行為ほど一つの課で教えられるものではなく、学習の進みにあわせて、レベルに則した文法や語彙を追加しながら複数の課で螺旋状に扱うべきものである。

4.3 フランスでの語学研修・滞在経験

語用論の場合、人間関係や前後の文脈など発話の状況を知ることが重要である。その点で、実際のコミュニケーション場面に身をおくことが大きな気づきにつながる。実際、フランス人がストレートに話すというイメージは、フランス人と接した結果抱いたものであると答えた学生も多い。3.で述べたように、今回インタビューした学生は全員短期語学研修や留学、親の仕事に伴う長期滞在のいずれかの理由でフランスに行っている。その経験から得た感想は以下のようなものである。

「理由は結構明確に言ってくる。私だったら、自分のなかで言うのをやめてしまうようなことを、『あ、言うんだ』と思ったことがある。」

「フランスでは適当に『どっちでもいいよ』と言うと会話が成り立たない感じだった。『oui か non どっちなの?』という感じ。」
「この言い方だときつすぎるかなと思っても、意外と向こうでは全然ふつうだったりして、『あ、これ使っていいんだ』と思うことがたくさんあった。」

フランス人との実際のコミュニケーション場面に出会えると、教室内では主に文法や語彙の習得に向けられる注意が、語用論にまで広がる機会となる。2～3 週間という短期語学研修ではなく、フランスに 1 年以上滞在した 2 人の学生からは、日仏の相違点を認めつつ類似性も指摘するコメントがあった。フランス人が謝らないというイメージについて以下のように語っており、相対的なものの見方をしている。そのうちの 1 人はフランスに 5 年滞在した経験があり、「フランス人は確かに"C'est pas moi" (それは私ではありません) とよく言うけれど、謝るべきところはきちんと謝るイメージのほうが強い」、「すみません、すみませんと日本語でよく言うイメージだけど、フランスでも結構聞いた」と述べ、さらに、自分の感じ方が一般的に日本人がフランス人に対して抱くイメージと異なっていることを認識していると付け加えた。また、フランスに 7 年滞在したもう 1 人は「"C'est pas ma faute" (私のせいではありません) は日本人もよくいう。『私じゃないよ』みたいに」と述べ、「最近思うのは、言語よりもその人の言い方によるのかな。小さいときは、日本は優しい国と思っていたが、でも日本で生活して、アルバイトとかすると、変な人もいるし、きつく言う人もいる。」と、「フランス人は」「日本人は」と一般化することの難しさに言及している。

また、アメリカに滞在したことのある学生は、次のように述べ、母語 vs 1 つの外国語という枠組みでは出てこないであろう視野の広さをみせた。「フランス人だけでなく、アメリカ人もイギリス人も、欧米の文化は責任の所在をすごくはっきりさせる文化なので、日本に比べて謝らないイメージはずっと強い。それを言うことによって、その人の人格攻撃にはならないと思っている。フランス人よりもアメリカ人のほうが『自分は絶対悪くない』と言う」と述べた。

Allport (1954)は接触仮説として、ステレオタイプや偏見は相手への知識の欠如によるものであり、解消には接触が重要であると述べている。しかし、接触があればステレオタイプ、特に否定的ステレオタイプが解消されるという簡単なことではない。逆に、単発の異文化間の接触は相違点を強調することもあり、有効な接触としてブラウン(1999)は「社会的および制度的な支持・十分な頻度と期間・対等な地位・協働」の 4 つを挙げている。従って、語用論的気づきを促すためにフランスでの語学研修や滞

在が有効だと安易に考えるわけではないが、少なくとも今回の学生にとっては一つの要因となったことがわかる。

5. 長期的な視点での語用論教育

ここまで、フランス語での断り方について学生が抱くイメージがどこから生じたのかを中心にみてきた。教材に使った一本の映画を通して、元々抱いていたイメージが強化され、「やっぱりフランス人は」という意見が得られた一方で、「意外にもフランス人は」という意見も出た。映画を観たことによって、フランス人の言語行動に対する印象が変わったと述べる学生が複数いた。

「フランス人も、ほかの人がどう考えているのかを気にすると知って結構驚いた。」

「私がイメージしていたよりは、フランス人も謙遜するし、断り方が日本人っぽい。

頼みにくそうだったり、「...」となったり

「フランス人はその場できっぱり『無理です』というイメージがあった。日本ははっきり言わずに保留するイメージ。フランス人が"Je vais réfléchir" (考えてみます)と言っていて、びっくりした。」

「欧米人も non とは言わずにやんわりと断る場合がとても多いことに驚いた。」

多くの場合、カリキュラムの関係で授業は教科書中心に行われ、ロールプレイのような運用につながる活動に時間を割くのが難しい。映画やニュース番組、歌といったレアリアを扱う場面も自ずと限られるが、これらのレアリアが目標言語に対するイメージを再考する機会になり得るのであれば、その機会を大切にしたい。

語学の授業で語用論を扱う必要性について尋ねたところ、11人全員が必要だと答えた。挙げられた主な理由は、次の通りである。

「依頼・断り・謝罪は言語行為のなかで気詰まりを伴い、また今後の人間関係を変化させる可能性もあるものなので、それらについて学ぶことは必要である。」

「社会人生活の中で、意見の対立や交渉というのはよく起きること。しかし、学校の授業で習うフランス語と実社会でのそれは違うことが多い。特に断りは、本当のことをいうだけでなく、相手を傷つけない配慮も必要である。」

「発話行為は会話のなかでよく使うし、重要性が高いにも関わらず、意識して授

業で学ばないと非常に単純でワンパターンな言い回ししかできなくなってしまう。」
「普通の会話であったことや何かについて話すのと違い、依頼や断りはほんの少しの言葉で全くニュアンスが変わり、それによって相手を動かすことも怒らせることもできるので、フランス語でこれらの表現を覚えることは必要だと思う。」

「授業で扱うテキストにはあまり出てこないが、コミュニケーションにおいて絶対に必要なもので、留学に行ったら必ず役に立つから。」

「人間関係においてトラブルはとても繊細なものであるから、できるかぎり失敗したくない。ましてや異文化だと自分が良いと思っても相手に悪く取られてしまうこともあるから」

以上のことから、学生は語用論に関する関心が高く、その必要性も認識していることがわかる。また、学生の一人は、英語の授業では語用論的特徴に関するテキストを読んだことがあり、フランス語ではどうなのかを知りたいと述べた。つまり、この学生は日本語と英語の語用論、さらにフランス語を加えた 3 言語の語用論の違いを意識しているわけで、このような関心を大切に育てていく必要がある。

6. おわりに

今回のインタビューを通して、日本人フランス語学習者が「フランス語ではストレートにものを言う」というイメージを強く抱いていることがわかった。また、そのようなイメージを抱く理由として、フランス語表現を直訳するのみで実際の運用場面での使われ方を知らないこと、そして語学テキストの内容が語用論的要素をわずかにしか含まないことが影響していることがみえてきた。学習者が過剰に直接的な物言いをする結果、自分の意図に反して無礼な印象を与えたとしたら、それはコミュニケーションとしては失敗である。このような誤解を防ぐためには語用論教育の強化が求められる。

本稿で紹介した授業とインタビューは一つの試みに過ぎないが、学生にとっても教師にとっても語用論的気づきを促す機会となった。「フランス人は意外と謙遜する」、「フランス人は思っていた以上にやんわり断る」というコメントからも推察できるように、フランス語話者に対する考えを改める学生もいた。外国語教育において、目標言語や文化について伝えるべき「正しい」イメージというものには存在しないが、一つのイメージが固定化されている場合に、幅広い視野から考える機会を提供することも重要である。

今回インタビューした大学生は 2 年次になった時点ですでに CEFR の B1、B2 レベ

ルに達しており、文法や語彙の知識の蓄積もある点で、語用論に目を向ける余裕のある学生だったと考えられる。中学・高校から第一あるいは第二外国語としてフランス語を学んできた成果であるといえよう。しかし、このような語学能力の高い学生でも、語用論的特徴については知らないことが多く、教師として語用論教育の必要性を改めて実感した。初級・中級レベルの文法事項や表現のなかにも語用論的側面を扱うべきものが多くあることがインタビューを通して明らかになったが、実際、初級レベルから語用論的特徴の指導が可能であり、かつ必要であることは英語教育の研究で実証されている。お互いのメッセージを正しく受け止め、理解できるようになるには、語用論の知識が不可欠であり、語用論的特徴への早い段階での気づきは、よりよい異文化間コミュニケーションにつながると考える。

(上智大学)

参考文献

- ブラウン, R. (1999) 『偏見の社会心理学』(橋口捷久, 黒川正流編訳), 北大路書房.
- 石丸久美子(2009) 「日本とフランスにおける相互ステレオタイプ of 考察—日仏学生へのアンケート調査の結果から」, *Revue japonaise de didactique du français*, Vol. 4, no.2, pp.133-141.
- 清水崇文(2009) 『中間言語語用論概論—第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』, スリーエーネットワーク.
- Allport G.W. (1954) *The nature of prejudice*,. Cambridge, Mass. : Addison-Wesley.
- Amossy, R., Herschberg Pierrot, A. (2004) *Stéréotypes et clichés*. Paris : Nathan.
- Austin, J.L. (1962) *How to do things with words*. Harvard University Press.
- Béal, C. (2010) *Les interactions quotidiennes en français et en anglais*. Peter Lang.
- Beebe, L. M., Takahashi, T., and Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic transfer in ESL refusals. In R.C. Scarcella, E.S. Andersen and S.D. Krashen (eds.), *Developing communicative competence in a second language*, Newbury House, pp.55-73.
- Brown, P., Levinson, S.C., (1987), *Politeness : Some Universals in Language Usage*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Debyser, F. (1980) Exprimer son désaccord, *Pratiques de la communication, Le Français dans le monde*, no.153, pp.80-88.
- Harada, S. (2007) Pour une discussion métapragmatique en classe de FLE, *Revue japonaise de didactique du français*, Vol. 2, n.1, pp.53-70.
- Harada, S. (2013) La pragmatique dans les manuels de FLE japonais : entre neutralité et stéréotypes, *Recherches et applications, Le français dans le monde*, No.54,

pp.170-179.

- Higashi, T. (1992) Convergence émotionnelle dans la pratique communicative des Japonais Analyse de la communication exolingue entre Japonais et Français, *Lidil*, 5, pp.7-13.
- Honoré, J.-P. (1994) De la nippophilie à la nippophobie. Les stéréotypes versatiles dans la vulgate de presse, *Mots*, vol. 41, no. 1, pp. 9-55.
- Leech, G.N., (1983), *Principles of Pragmatics*, London:Longman.
- Takeuchi, Y. (2004) Rencontre interculturelle franco-japonaise, Découvrir l'autre et le comprendre, *Lidil*, 29, pp.77-104.
- Thomas, J., (1983), Cross-cultural pragmatic failure, *Applied Linguistics*, 4, 91-112.
- Yatabe, K. (1994) Auto-image et hétéro-image: représentations du Français et du Japonais chez les migrants nippons en France, *Mots*, vol. 41, no. 1, pp.129-152.

The pragmatic awareness of Japanese learners of French about the speech act of refusal

Sanae HARADA

This paper aims to show how Japanese learners perceive some pragmatic aspects of French and to emphasize the need to address pragmatics more in the context of teaching French in Japan. The results of the interviews with 11 students show that their perception of speech acts such as refusal can be distorted by their lack of knowledge about the pragmatic characteristics of French. The analysis leads us to reflect on the consequences of teaching based on the translation-grammar method and on textbooks which do not include many pragmatic elements.